

竣工記念初春興行

文楽座人形浄瑠璃

四ツ橋

文楽座



高尚な化粧美の
クラブ白粉



カテイ石鹸本店謹製



(錢十七金價正號一) 粉白水ブラク 品粧化級堂アラク

落成記念
文樂座人形浄瑠璃

初春興行



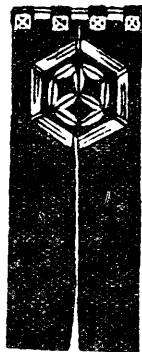
前 伽羅先代萩
竹の間の段 (三時)
御殿の段 (三時四十五分)
床下の段 (四時)
御休憩時間 幕間 二十分の豫定

中 御祝儀 壽式三番叟
引抜き 柱立萬藏
御休憩時間 幕間 二十分の豫定

次 双蝶々曲輪日記
橋本の段 (六時五十五分)
御休憩時間 幕間 十五分の豫定

切 平家女護島
鬼界ヶ島の段 (八時)
御休憩時間 幕間 十五分の豫定

夕きり廊文章
伊左衛門屋の段 (九時十分の豫定)



人形芝居について

◇人形芝居發達の事

◇文楽座なり立の事

◇人形頭説明の事

今から見ては簡単なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は己に十餘年前に「和名少」や「新猿樂記」「雲州往來」に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の「傀儡子記」に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、三と云ふのが傀儡を舞はせた事が「散木奇歌集」に見えて居ります。手遣ひの幻稚な物には相違なかつたので、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立て命脈を維いで居たらしく御座います。浄土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの據頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら浄瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した浄瑠璃、又それに合せて舞う人形と此三者が綜合される事に成りました。

たのが、慶長中、即ち徳川の始頃ですが、忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町とか葺屋町とか、櫓が立つて此人形芝居が繁昌したのであります。順序として當然此頃には最う人形の類も増してはゐたのですが、然し舞臺などは固より無く其人形として首があるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛騨が始めて其手足の工夫もしたものです。由來此據なるものは人形師の所有なりしを後に浄瑠璃太夫の勢強くこれを専らにするに至つたとの事。さて竹田のからくり人形が出来たり、野吊松のの

ろ、其人形が出来たり、次郎三郎がお、やま、人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になると大阪へ義太夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名浄瑠璃を澤山書き卸し、しかも其人形遣ひとして辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつたと云ふのが、始めは此人形を下の幕と上の額隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに随つて自然遣ひ手の身體も動く之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛が袷を着て手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る事がないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豊竹座の出來るあり、即ち西と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競争的に繁昌を來したのですから、従つて其進歩發達は眼覺しいものがあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺幕の上に小幕を引くやら、山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にして出ながら先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座「大内鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になると豊竹座「武烈天皇

「儀」の佐手彦の肩を動かさしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遺ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹木座の國性翁後日合戦に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の嗜業を示して以來といふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある「夏祭」の人物に始て帷子衣裳を着せるとか、或は其遺つた一寸女房おたつに桔梗の帷子黒縹子の前帯淺黄の縮緬子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で真似てゐる所事實此時代といふものは緑盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、帷子の幟り林立

して其最負は凄まじい有様であつたと云ひます。江戸とて矢張之と同じく、慶長の昔薩摩浄雲が淡路の人物舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てからと云ふものは又漸次に其勢力範圍と成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になるも漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大阪の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたと見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他大夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れりと云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に橋を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御霊神社境内へ移つたのであります。

す。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失し其後本城を物色中このほど四ツ橋に新築いたしました、而も日本にこれ一座きりと云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます次第で御座みます。序でながら此人形は大體、首、胴、手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきまはしては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばけんびし（檢非

遣使）と云ふのは、竹本座の「用明天皇職人鑑」の時檢非遣使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば「寺小屋」の源藏、「妻八」の八郎兵衛、或は「千本櫻」の銀平、「陣屋」の盛綱のごとき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之ですが然し南水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素靈鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があると云ひます。兎もあれ昔相丞や「薄雪」の兵衛、あるひは「統治」の孫右衛門などを勤める首で、矢張竹本

座（近松が書いた「日本振袖始」から出た人形だと申します、それから若男といふのは源太とも呼んでゐるとか聞きますが持役としては「朝顔日記」の駒澤に「太十」の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめると「阿古屋」の重忠に成つたりし他種類若男は敦盛の役などをするると云ひます。又所謂おやまの中にはおむす」と云つて之は勿論娘の事で「野崎」のお染「壺坂」のお里「妹香山」のお三輪などを勤めるのもあります、南水漫遊に傾城とあるのも多分これと同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



竹の間の段

前 伽羅先代萩

竹の間の段
御殿の段
床下の段

政 豊竹駒太夫
八 竹本文宇太夫
沖の井 豊竹和泉太夫
小 竹本鏡太夫
鶴喜代 竹本常子太夫
千松 竹本播路太夫
忍び 竹本龜久太夫
こし元 鶴澤淺造

人形

妻 沖の井 吉田 玉七
一 鶴喜代 桐竹 紋司
乳 子千松 吉田 榮三郎
女 醫政岡 吉田 文五郎
忍 小政 吉田 扇太郎
女 醫小牧 吉田 市松

竹の間の段

伽羅先代萩は安永六年四月奈川御輔の作で初めは歌舞伎に書卸されたものでありますが其後探り芝居に改作されたものであります。次いで天明五年正月江戸堺町結城座の操居に上演されたものであり作者は松貫四、吉田角丸、高橋武兵衛等で今日演ぜられる先代萩の原作でありますその時の名題は奥州秀衡遺跡争論

御殿の段

奥州五十四郡の大主伊達義綱公は江戸参勤の砌ふと吉原の傾城高尾太夫を戀せぬ途にその色香に溺れて全くお家を顧みない、公儀への聞にもあり奸臣貝田勘解由、仁木彈正、錦戸刑部は主君を無理に隠居させて幼君一人のお家横領を企てる、一味はその他渡會源兵衛、女房八汐、大場道

御殿の段

切 竹本土佐太夫
野澤 吉兵衛

人形

乳 母政岡 吉田 文五郎
一 鶴喜代 桐竹 紋司
妻 子千松 吉田 榮三郎
妻 沖の井 吉田 玉郎
妻 八沙 吉田 玉治郎
榮 御前 桐竹 政龜
女 醫小牧 吉田 扇太郎

床下の段

竹本鶴尾太夫
豊澤 猿二郎
鶴澤 友若

人形

原 田甲斐守 吉田 玉松
松ケ枝節之助 吉田 玉幸

益、女房小牧等である。幼君は鶴喜代君とて悪人等に毒害の惧れあり、乳人政岡が之を守護し、その他伊達外記左衛門、松ケ枝節之助等の忠臣が苦慮の忠義を盡すといふお家騒動の白眉であります。即ち御殿はこの狂言の中樞で忠義一徹男まさりの乳人政岡が苦心は一通りでない、一時も油断なく、飯も御殿で自ら炊くといふ、忠節振りである。腹に一物ある梶原の妻榮御前が頼朝公よりの下きれ物として菓子折を鶴喜代君へ持参すると、豫ての言ひつけて政岡の一子千松は突然横から走り出で菓子を頬ばると見る／＼毒が廻つて七轉八倒の苦悶をします、企てを見せじと八汐は千松を懐剣で抉るを、政岡ちつと観念して、涙一滴眼にもたぬと

床下の段

いふ男まさりの氣丈に流石の榮御前も之を見て、政岡も悪人の同腹中と思ひ込み一味の連判状を手渡してしまふといふ全段のヤマであります。この御殿は土佐太夫の得意の語りもので、攝津大塚の遺訓のまゝを演じますが近世の名人攝津大塚も之を得意とし文樂座の代表狂言となつた程で文樂の由縁の深い狂言であります

下女おまつ

吉田文之助

駕の甚兵衛

吉田 榮三

駕の太助

吉田 文作

山崎與五郎

桐竹紋太郎

傾城あづま

吉田文五郎

橋本治郎右衛門

吉田 玉松

山崎與次兵衛

吉田玉治郎

衛、甚兵衛といふ武士、商人、駕屋の三人の階級を個々に表はし同年輩の性格風情を語り分けるといふ妙味のある淨瑠璃であります。この段のヤマは娘あづまと親甚兵衛が廻り合つて親子の名乗りを交はすといふにありますが、其間、甚兵衛が駕かきの口癖で娘にはいたのみます〜と何気もなく駕かきの気分を出すといふ伏線があります。今度津太夫は十年振りで語りますが、初役は大正四年六月文樂座であります。その次は大正十年九月の文樂座で今度で津太夫としては三度目の文樂座上演

であります。先代(二代目)津太夫の十番ものとして居たもので自然その先代のまゝを津太夫が傳へて居るので皮肉物でも變つた狂言であります。この狂言はまた一人も死なぬ目出度い終末を見せるといふ慶びのものでありまして、津太夫が大文字屋めくら(天王寺村)と共に得意中の得意として居るものであります。昨秋東京新橋演舞場で初めて出したところ非常の好評を博し大當りであつた目出度いものでこの橋本と引窓はその時の太夫の資格で引窓が先になつたり橋本が先になつたりするのであります。



鬼界ケ島の段

切 豊竹 古靱太夫

鶴澤 清六

人形

俊寛 僧都

吉田 榮三

次 平家女護島

鬼界ケ島の段

近松門左衛門六十七歳の作、享保四年八月十二日初日の竹本座に書卸されたもので本名題は「女牛若平家女護島」初代竹本政太夫、二代目義太夫を襲名した名人が始めて床にかけて以來安永元年八月竹本座で初代綱太夫が平家女護島二の切として演じ初代二代の彌太夫を経て四代目染太夫より染太夫系のものとなり、明治二十三年十月一日初日で始めて御靈文樂座へかけられたもので、その時

の太夫は二代目長尾太夫で、名題は「立春姫小松(洞ヶ嶽)の二段目」として演じてあります。此度上演する古靱太夫はその當時十三歳の幼年でした。實に四十年振りで、文樂として二度目の上演であります。古靱太夫がこの名作を此度の初役で復活するといふのですから再建の文樂座として意義あるものであります。さて平家女護島全段の内容はと申しますと、平重衡南都焼討よりの凱旋に筆を起し、清盛暴横の極、俊寛の妻あづまや少將成經の情人千鳥を虐殺せし祟によりて熱病にかゝりて悶死の事、鬼

丹波少將成經 桐竹 政龜

平判官康頼 吉田 玉幸

丹左衛門尉元康 桐竹 門造

瀬尾太郎 吉田 玉松

海土千鳥 吉田文五郎

郎 黨 大ぜい

雜色 大ぜい

界ヶ島流人の生活の模様、その赦免歸洛の狀、牛若女裝して常盤の館に入り込み共に心を合せて、源氏一味の徒を糾合する事、宗清父子の苦節等を叙し文豊源氏の蜂起平家滅亡の經路を夢むといふ條でありますがこの度上場する鬼界ヶ島は同狂言の二の切りで俊寛鬼界ヶ島の人間苦を見せたもので流人の生活の寂寥に疊千鳥の色氣を加へたところ浮曲の妙味であります。即ち平家を亡さん陰謀露見して、清盛の爲に鬼界ヶ島に流人の身となつた成經、康頼、俊寛の三人は明けくれ都の音信を待ち詫びて淋しい月日を送つてゐる。所へ

都から高家の武士瀬尾太郎、丹左衛門尉が中宮御産の御祈禱に就て、赦免狀を携へて鳥に船をよせた。それには俊寛の名が洩れて居たが小松内府の計ひで俊寛も赦免となつて喜び勇む。然るに成經一人浮かぬ顔してゐるのは、島で契つた蟹の千鳥と別れるのが切ないのである。瀬尾が千鳥の乗船を拒むので俊寛は怒つて之を斬つたが、つくづく思へば都に歸つたとて、一家離散し、浮世に望みなき身、我身に代へて、千鳥を成經と共に都にやり、自らは永へに島の流人として残るといふのがこの段の内容であります。



吉田屋の段

夕左衛門 竹本 鑲太夫
伊左衛門 豊竹 つばめ太夫
喜左衛門 竹本 貴風太夫
おきき 豊竹 富太夫
太鼓持 豊竹 千駒太夫
豊澤新左衛門
豊澤猿太夫
鶴澤清次郎

人形

藤屋伊左衛門 吉田 扇太郎
吉田喜左衛門 吉田 門造
扇屋おきき 桐竹 紋七郎
太鼓持松助 吉田 光玉市郎
太鼓持由八 吉田 文二郎
仲田屋若居者 大田 ぜい

切 夕左衛門 廓文章

吉田屋の段

この廓文章は「夕霧阿波の鳴戸」の改作で安永九年並木十助、並木五兵衛の作で、十二月九日より翌年二月八日迄大阪角座に於て「歸命廓文章」として興行された當り狂言で新町扇屋の夕左衛門と馴染を重ねて大盡遊びの放埒をつくした藤屋伊左衛門も、今は七百貫目の借金を負ひ親許は勘當となり、京大佛馬道に逼塞の身の上、廓で餅つきの音立つ日伊左衛門は深笠笠に紙衣を着け、尾羽打枯らして、新町の揚屋吉田屋喜左衛門の門口に立つた。喜左衛門夫婦の好意で手厚くもてなされ、奥の間へ通されたが子まで生れた仲の夕ざりは、聞けば此頃阿波の平太鼓とかに深くなつてゐるとの噂、現に隣り座敷で足腰をもんで居るので伊左衛門は嫉妬の怒り、痴話口説が當じて夕ざりを萬歳傾城と罵つたがやがて、心も解けて逢瀬、此處へ藤屋の親御妙順から使で伊左衛門の勘當も許され病みつかれた夕ざりの身代金八百兩が届き兩人は親の慈悲に嬉し泣き、夕ざりの病も目出度く回復するといふ初春氣分の狂言であります

南一 直營 文樂座食堂御案内

△一階 (和食堂)

| | | |
|--------------|--------|---|
| 御辨當 |一 | 圓 |
| 御食事(五品御飯香物付) |二 | 圓 |
| 茶碗むし |五 | 錢 |
| むし壽し |五 | 錢 |
| にぎりすし |五 | 錢 |
| 親子井 |五 | 錢 |
| むし蛤 |五 | 錢 |
| くらげ白酢和へ |三 | 錢 |
| お吸物 |三 | 錢 |
| ぶどう豆 |二 | 錢 |
| お土産 |一 | 圓 |

△二階 (洋食堂)

| | | |
|-----------|----------|-------------------------|
| 菊正宗 |三十五 | 錢 |
| 特アサヒビール |五 | 錢 |
| ダイヤモンドレモン |三 | 錢 |
| ソーダ水 |十 | 錢 |
| アイスクリーム |二 | 錢 |
| 洋風定食 |二 | 圓 |
| 其他洋食一品御料理 |二 | 圓 |
| 酒場 |二階 | 食堂 |
| 賣店 |は |場内一階の東側 場内二階の東側 |

◎二ひみき名簿募集

規定

- 一、申込は必ず官制葉書の事
 - 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記の事(御住所御芳名の他一切不要)
 - 一、吾々は御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申し上げ、且つ御優待方法を講じる事
 - 一、會費その他一切申受けざる事
 - 一、宛名は大阪市南区四ツ橋
- 文樂座編輯部宛ノ事

昭和五年一月一日初日開場

一日より三日まで 午後二時開演
四日目より 午後三時開演

- 一、等お座席.....御一名.....金三圓五十錢
- 一、等椅子席.....御一名.....金三圓
- 二、等席.....御一名.....金一圓五十錢
- 三、等席.....御一名.....金八十錢

五日前より發賣の一等座席・二等椅子の

前賣切符御利用願上候

人形淨瑠璃興行

文樂座回数觀覽券發賣致居候

電話南 三七八八番
前賣専用南四七一番

燦たる新春の偉容
月刊『道頓堀』

(新年號發賣中)
一部金參拾錢

本號は『文樂座號』です。
是非一部お買求め下さい。

印刷所
社 トラブ
堀戸江區西市阪大
二三日了ニリ通南

印刷者
郎三榮村今
堀戸江區西市阪大
二三日了ニリ通南

編輯兼發行人
三良塚大
座樂文橋ツ西阪大

昭和四年十二月一日印刷
昭和五年一月一日發行

いよ番一にめ止レア

ムーリク^美身^美ブラク

大切な皮膚を
保護して美し
く健かな色艶
を増すクラブ
美身クリーム

美しくなる

クラブ
石
鹸

